

コロナ禍乗り越え一般向けに自主公演

埼玉・久喜市立太東中学校「ゲキ部」

中学校での演劇指導や脚本で知られる元中学校教員の齊藤俊雄さん。現在、埼玉県久喜市立太東中学校（中島敬校長、生徒428人）の「ゲキ部」で外部講師を務めている。コロナ禍を受け、数年にわたって一般公開での発表ができなかったが、今年8月、久喜総合文化会館小ホールで自主公演を行った。当日の様子を同市立久喜中学校の時代に同僚であった田畑栄一・特別記者にリポートしてもらった。

田畑特別記者がリポート

元教員の外部講師

齊藤俊雄さんが指導



「ふるさと」の一場面。劇の主人公と同様、演じた生徒も成長を実感する

齊藤さんは演劇指導に定評があるだけでなく、手掛り越えたのかを知りたいと、脚本は、全国の学校で、思いついた材料を決めました。上演され、書籍にもなっています。今回、齊藤さんが、コロナ禍によって3年間、一表現活動を通して生徒たち、一般公開できず、大会での審

2作品上演 人間関係の悩み克服する姿など表現



自主公演終了後の記念撮影。充実感から笑顔があふれた

査も録画したものに限られました。齊藤さんにとっても、生徒にとっても、しんどい3年間だったことでしょう。齊藤さんは、全国一斉休業期間になった初期の頃、「これから、たとえ劇が上演できなくなったとしても、自分たちの中で劇への思いは止めずに持ち続けていこう」と生徒に語り、自主発表の方策を模索し続けました。

「活動続け自信が付いた」

成長を実感する生徒たち

時代設定は2016年、ウルトラスピン誕生からちょうど50年目の節目に当たります。主人公は中学2年生の「友里」たち。友里は演劇部から依頼を受けて脚本作りを始めるが、いじめをはじめとするさまざまな人間関係を経験し、時には喜び、時には涙しながら乗り越えていきます。その背景には、コロナ禍、ロシアによるウクライナ侵襲など現実の今の問題を想起させる未来が描かれています。

2作目の「ふるさと」は、東日本大震災のあった2011年に創作を始め、翌年に、1月に初上演した作品です。自主公演終了後の記念撮影。充実感から笑顔があふれた

公演後、「セブン」で脚本を依頼する役を演じた3年生の中村太郎さんに感想を尋ねると、「ゲキ部に入ってから、初めての一般公開で、多くの人の前で演じることができて喜びいっぱいです。心の底からうれしかったです」と興奮気味に語りました。

同じく3年生の平井由愛さんは、二つの作品で性格が全く異なる人物を演じ、通して積極的になり、私もやり切った達成感から生まれる言葉の力を感ずる。自分を表現することで、初めて「自信」が生まれるのです。

昨年度までゲキ部メンバーだった高校1年生の2人は、「うらやましいです。僕たちは多くの人の前で演じることがなかったのだから」と後輩たちを優しく見つめます。

今回の発表について齊藤さんは、「ようやく一般公開にたどり着くことができました。価値を改めて感じました。」

3年生で部長の口田朱希さんは、「セブン」と「ふるさと」の両作品で主人公を演じました。せりふが多い役を連続で務めたことを褒めると、「とても良い演技ができました。二つの役のそれぞれで声を変えて演じるように工夫しました。活動を続けてよかったのは、何より『自信』が付いたことです」と瞳を輝かせていました。

自主公演終了後の記念撮影。充実感から笑顔があふれた